

## 戯曲『カルナバーラ (Karnabhāra・カルナの苦勞)』とその周辺〔II〕

マハーバーラタにおけるラードヘーヤ (Rādheya、Karna)

野 部 了 衆

### **Bhāsa's Sanskrit Drama, Karnabhāra (Karna's burden) and some Problems of its, part 2**

**concerning Rādheya or Karna, one of the heroes in the Mahābhārata**

**Ryoju NOBE**

#### Summary

This paper tries to analyse that dealt with some accounts depicted about Rādheya or Karna from Mahābhārata. Its experiment is very important process to investigate the mainly theme of Karnabhāra, a Sanskrit drama by Bhāsa for us. As a result, there is depicted a brave man Rādheya in our Epic. Exactly sometime he came across so tragic affair. But the writer of our Epic answers in the affirmative whole things that were acted by him. So perhaps there is an element of the brave, the theme of our Drama.

Received Oct. 31, 1996

Key words: Sanskrit Drama, Karnabhāra, Karna (Rādheya), Bhāsa, Mahābhārata

『マハーバーラタ (Mahābhārata)』に見られる、ラードヘーヤについての情報において、彼自身を弁護したり彼を擁立するものはドゥリヨーダナ (Duryodhana) の言葉に見られる程度である。この叙事詩においてラードヘーヤはどのように処理されているのか。彼はパンドウ三兄弟 (ユディシュティラ、ビーマセーナ、アルジュナ) と母親を同じくしている。彼はクルクシェートラの戦において彼らと敵対するクル軍の戦士として戦い抜く。しかし、この大叙事詩はこのような設定から想定される悲劇性を叙述するための試みを意図してはいない。もちろん、彼自身への条件付けは以下に述べるように相当に厳しい。同族の戦闘の中で彼は自身の保全や利益のための選択をすることなく、ただ自身の仕える主人のため、一度交わした友情のため、武人としての任務の完遂という義理に自身の命を賭ける勇敢な戦士として如何に生き抜くかを自らに問い正しているかのようなのである。それ故、バーサによるサンスクリット劇『カルナバーラ』の主題は悲嘆ではなく、勇武と云うことになるだろう。

## 1. ラードヘーヤの誕生に過失があるのか

ラードヘーヤの誕生の前後の物語はアディパルヴァン (Adiparva chap. 111)、ヴァナパルヴァン (Vanaparava chap.302~306) に述べられている。それを要約すれば以下のようなものである。

スーラ (Sūra) 王はヴィリシュニ (Vṛṣṇi) の一族である。彼には息子ヴァスデーヴァ (Vasudeva) と娘プリター (Prīthā) があった。彼の仲良し従兄弟のクンティボージャ (Kuntibhoja) には児がなかった。彼は彼女 (プリター) を養女にした。彼女はクンティの娘、クンティー (Kuntī) と云う名前と呼ばれた (Adiparva 111.1 & 2)。

ある時、彼女は養父を尋ねて来た聖者ドゥルヴァーサス (Durvāsas) の逗留の間、彼の世話係を託され、彼によく仕えた。その返礼として彼は彼女を呼び出し、ある呪文を授けた。その呪文は彼女が将来、通常では子に恵まれない境遇であることを予見した聖者からの贈物であった (ibid. 111.6)。それは任意に好みの神を招き、その子を生むことができ、五度有効であると云う。未だ幼い少女であった彼女にはその呪文の意味するところが理解できなかった。朝明けの太陽の輝きの描き出す光景に魅せられた彼女は、スーリヤ神 (Sūrya・太陽) が側に居たならば如何程に素晴らしいことかと思った。その光輝の中で彼女は聖者に授けられた呪文を思い出した。好奇心に駆られた彼女は呪文を唱えてスーリヤを呼んでみた。彼女は面前に現れた彼を見て狼狽し、弁解したが容赦して貰えず、彼の優しい言葉と微笑みに彼女の恐怖は除かれて彼を受け入れた。彼は立ち去る前に彼女に云う。私の息子は如何なるものも貫通できない甲冑 (kavaca) と耳環 (kuṇḍala) を着けて生まれ、偉大な武人になるだろう、と。

スーリヤ神の恩恵によって懐妊、男児を出産した彼女は、直ちに処女性を回復した。余りにも幼すぎて母親としての喜びを知らない彼女は、出産したことの恥のみ心配だった。両目に涙をたたえる彼女はわが子を、滑らかで美しい枕を備え付けた枝編みの木箱 (籠) に入れてアシュヴァー (Āśvā) 川の水に委ねた (Vanaparva 307.7)。激しく泣く彼女は叫んだ。おお、息子よ。大空、大地、諸天界に住む生類の全て、そして水は貴方の幸いに貢献するでしょう (ibid. 307. 10)。如何なる悪も彼に降り懸かせないで (ibid. 307. 11) と。貴方の道に栄光あれ。貴方を水の主 (Varuṇa)、空中を巡る風の神 (Pavana) はお守り下さい (ibid. 307. 12)。死なないでしょう。高い天界にいる神々の全ては貴方を守って下さいますように (ibid. 307. 14)。貴方を発見する婦人は幸運な女性になり、貴方をわが子として育て、成長した貴方を見るでしょう。 (ibid. 307. 17~19)。

このとき既にこの物語において、クンティーの眩きを通して彼がパーンドゥ兄弟・五王子らと行動を共にすることの不可能さを示唆している。

この子が御者アディラタ (Adhiratha) に発見された。この夫妻に養育された彼は、ラード

ヘーヤ (Rādheya, ラダー Radhāの子) と呼ばれた。また再生族の人々は彼をヴァスシェナ (Vasuṣena、財宝を所有するもの)、ヴリシャ (Vṛṣa、輝くもの) と呼んだ (ibid. 308. 13 & 14)。後に、生来、身に纏っていた甲冑と耳環を身体から切り離してインドラ (Indra) に施与したとき、彼からカルナ (Karna、切り離せるもの) と云う名称を与えられる (Adiparva 111. 31)。

ラードヘーヤ自身が河に捨て流されねばならない過失は何処にも見あたらない。この世に生み出され、生命を恵まれた児は胎内で親の声を聞きながら育って来たのであるが、体外に自分の生活する空間を獲得したとき、ただ、自らの親を自らの眼や耳などの五感と五体で確かめる。人としてこの世に生命を恵まれたと云うことは、その人自身主体的に自己の存在を確かめるならば生まれさせられた生命、生み落とされた生命と云うことにほかならない。それ故に、人は自分の意志で親を選択できず、そのことは生まれ出て来る生活空間・場所も選べず、生まれ出る日時、生命果てる日時もまた自らの意志で決定できない存在なのである。これらに係わることで、その人の人格的存在に不利益を生じさせる行為は全て差別に繋がる。このことを考慮するとき、彼自身に如何程に、何処に過失があったと云うのか。

ラードヘーヤは処女クンティーの気まぐれによって生まれたが、『マハーバーラタ』から知り得る情報からすれば、彼の母親クンティーはクシャトリヤ (kṣatriya) の生まれであり、父親は神、スーリヤである。パーンドウ兄弟も各々クンティー、マードリー (Mādrī) と神々との間に生命を承けた存在である。それ故、客観的観点から見た場合にも彼が卑下されねばならぬ存在ではない。それにも拘らず何故に彼を徹底した被差別の境遇に孤立させ、苛酷な荊冠のもとに生命をうけた人物として処理されなければならなかったのか。『マハーバーラタ』のこの物語が作成された時期には既に、スーリヤ神よりもインドラ神の方が人々の敬慕の対象として優位を占めていたと云うことを示唆するのか。彼自身に負わせられる過失と云うよりも、気まぐれのクンティーにおける過失、彼女の母親としての彼への負債、責務がないと云うのか。彼女の精神的苦悩が叙述されてはいる (Udyogaparva 144. 20~25) が、彼女の動向は全て肯定的に処理されており、そのことはこのクンティーの行為は全て、スーリヤの恩寵の範囲内のものであると云うか。それ故に、彼ラードヘーヤに対する生母としての責務から彼女を解放しており、彼女の行為を全て肯定的に容認してこの物語の作者は進めているのかも知れない。何れにせよ、スーリヤの夢告のほかに彼に対して積極的に何ら加護する試みは見られない。この事実はラードヘーヤにとっては相当の負荷であることには相違ない。

## 2. スータプトラ (sūtaputra、御者の息子) と云うことでの疎外

アシュヴァー河の水は本流のガンガー (Gaṅgā) 河に注ぎ込み、彼の詰め込まれた枝編み木箱は水浴びをしに来た、クル家に仕える御者アディラタに拾われて彼の家に持ち帰られた。子宝に恵まれない御者夫妻は彼を養育した。そして、彼はスータヴァンシャ (sūtavamśa、御

者の家系)の生まれのものとして処遇せられている。結果的には、このスータヴァンシヤが彼自身に大きな枠を填めている。彼が甲冑と耳環を着けて生まれたことから彼らはヴァスシェーナ (Vasuseṇa, 財宝を所有するもの、すなわち、素晴らしい天界の甲冑と耳環を身に付けて生まれたため)と命名した (Āraṇyaparva 302)。しかし、養父は妻ラーダーの子供と云う意味で彼をラードヘーヤと呼んだ。幼少よりクル家に仕えていた彼は立派に成長した。

シャンティパルヴァン (Śantiparva chap. 2~4)によれば、ラードヘーヤは素晴らしく高水準の活力を所有したスータプトラとして知られていた。彼はハスティナブラ (Hastinapura)に住む、射手として名高いドローナの教練を受けていた。彼は幼い時期からヴァスデヴァ (Vasdeva、即ちクリシュナ)とアルジュナの友情、ユディシュティラへの人々の愛情に対して羨望と嫉妬の思いを抱いていた (ibid. 2. 6&7)。ある日、秘かにドローナを訪ね、ブラフマの武器を修得したい旨を申し出た。彼はラードヘーヤの意図を見抜いている。しかし、彼はアルジュナへの偏愛から、原因がラードヘーヤにあるかのようにしてそれを断わった。即ち、全ての誓いを正しく実践したにもかかわらず、一人のバラモンをさえ救出できない者は不可であり、その武器はバラモンが取得すべきものであり、さもないときは耐乏の諸苦行を实践したクシャトリヤが修得すべきで、それ以外の者は不可である (ibid. 2. 12&13)と。つまり、その理由はスータプトラのような身分の者にはそれを教えないと云うのである。彼にはスータ階級であることに起因する苦渋をここにおいても拭いきれ得ない。彼の弓術征服への願いは堅く、尊崇する師匠ドローナの許可を得て、それを学ぶために、マヘンドラ (Mahendra)に住んでいる尊者パールガヴァ (Bhārgava、別称パラシュラマ)を訪ねる決意をした。彼はドローナの師でもある。ラードヘーヤは彼がクシャトリヤ階級の嫌悪者であり、彼のもの凄い怒りについても知っていた。そのとき、ラードヘーヤはスータ階級がクシャトリヤとバラモン (brāhmaṇa)の間に生まれたものであり、それ故この際、自分は彼にバラモンであると云うべきであると決意した。そして彼は偉大なパールガヴァのアーシュラマ (āśrama、仙境)へ出かけた。彼はラードヘーヤの謙虚さと若さを気に入り、歓迎した。

彼のラードヘーヤへの教育が開始された。このアーシュラマでの歳月はラードヘーヤにスータプトラであることからの諸屈辱を忘れさせた。パールガヴァに歓迎されて諸武器の使用法を学ぶためのマヘンドラ山での生活は彼にとって楽しいものであった。ガンダルヴァやヤクシャ、神々との交わりもありたちまち人気者になっていた (ibid. 2. 17&18)。

そのようなある日、弓と剣を携えた彼が仙境沿いの海岸を散歩しているとき、動物の気配を感じて彼は矢を放った。彼によって射抜かれた的は不運にも、日々アグニホートラ (Agnihotra)を実施しているバラモンの所有する雌牛であった。彼はバラモンの処へ赴き、ことの次第を告げる共に代償の支払いを申し出て許しを乞った (ibid. 2. 20)。しかし、激怒したバラモンは彼を呪うことで自分の怒りのはけ口を求めた。貴方は自分の敵、貴方の心の許し難い敵と闘っている最中に貴方の戦車の車輪が大地に沈むだろう (ibid. 2. 24; Kārṇ-

aparva 42.4)。貴方が私の罪のない雌牛を殺したとき、彼女を脅かした危険に彼女が気付かなかったときと同様に、貴方がそれに対して僅かの準備をせられたとき、貴方は自分の敵によって殺されるだろう (ibid. 2. 26～29) と。この出来事についてラードヘーヤは自分の師匠に報告したかどうかは記されていない。ラードヘーヤは唯一、武器の知識に傾注した。知識は威力を意味し、名声を意味した。それは彼に許された諸条件の範囲で描き得る人生における唯一の生き甲斐とでも云い得るものである。

ある日、厳しい断食で非常に体力を消耗していたパールガヴァは自身の隠棲所の近接地で、ラードヘーヤの膝を枕にして眠りに入った (ibid. 3. 4；Karnaparva 42.5)。幾時かが経過した。そのとき、ラードヘーヤの身分を露呈する事件が生じた。彼の太股を吸血甲虫が突き刺した (ibid. 3.7)。苦痛は耐え難いものであった。しかし、彼は師の眠りを妨げないように堪え忍び、動かなかった。太股の突き刺し口から彼の血が滴り、パールガヴァの顔を濡らした。その感触に目覚め、その光景に彼は恐れ嘆じた。貴方は何をしたのだ、如何なる恐怖もなしに。この事件の真相を云え (ibid. 3.10&11；Karnaparva 42.5&6) と。

ラードヘーヤがバラモンの生まれでないことを知ったパールガヴァは激憤した。私はクシヤトリヤとバラモンの間に生まれたスータヴァンシャです (ibid. 3.26)。人々は云います。私はラーダーの息子と云います。ブフリグ族の貴方様は諸武器の使用方法を修得するためにこのような行為をしでかした貧弱な私を宥めてくださるべきであります (ibid. 3.27)。諸ヴェーダや他の知識の補助学において、尊い教導師は人々の父親であります。貴方が貴方の家系の一員として私を受け入れてくださったのはこのためであります (ibid. 3.28) と。

ラードヘーヤのパールガヴァへの許しの懇請は空しかった。父子の関係においては父は子の過失に寛大であるべきである、すなわち父親は子供の過失を許すべきものであるという前提の中で彼の言葉が展開されており、師匠パールガヴァと彼の関係は父親と子供の関係以上に親密であった故に、彼自身の過失は容赦されるべきであり、また学問にはカースト、信条は限定理由にならないという見解を読み取ることができる。そしてまた、高潔な人格者である師匠は弟子すなわち彼自身の過失を許すべきであるというのである。さらにまた概してリシ (ṛṣi、聖者) らは本来自身のあらゆる感情を制御する存在とされている。パールガヴァも幾年月を苦行の実修を重ねた人物であったが、弟子の嘘言、裏切り行為に対する激怒は、修行によって獲得した自己制御の力を圧倒した。ラードヘーヤの彼に対する信愛よりも、彼の嘘言への激怒が優位を占め、リシの使用できる唯一、最大の武器を行使した。

喜びもなく、震えおののき、合掌して大地に伏しているラードヘーヤに対して、怒りながらも微笑んで師匠パールガヴァは云う。貴方は諸武器への欲求を抱いたときから偽りの行為がなされた。おお哀れな者よ、それ故、このブラフマの武器は貴方の記憶に残らないだろう (ibid. 3.30)。その武器が必至に必要なときに、貴方に匹敵する兵士と遭遇したとき貴方はそれを思い出せないだろう (ibid. 3.31；Karnaparva 42.8)。ここには偽りの行為をする人間

の居る場所などない。大地において、戦において、貴方と同等のクシャトリヤは居ないだろう (ibid. 3.32) と。パールガヴァの僅かに和らいだ様子の許しの言葉を告げられて、ラードヘーヤは彼の元を立ち去った。バラモンの言葉は変更できない。しかし、パールガヴァが彼を保証できる一つの事柄がある。彼ラードヘーヤは大地に永久に光栄を与える最も偉大な射手として後世に知られるだろう、と云うのである。

ラードヘーヤの心は自身に正直なのか、否であったか。彼は自分の身分をバラモンであると偽っていた。しかし、それは彼にとって、自分の心の全てで求め懂れていた学問を獲得できる唯一の方法であったのである。賢者は云うではないか、結果が手段を正しくする、と。彼の目的は知識を学ぶことであり、そのために師匠パールガヴァに不実を云ったのである。それが、つねに、他のものに対して罪を成就させるならば、嘘は罪である。しかし、彼は如何なる罪をも他に対して犯そうとしていない。それ故、彼の不実、嘘は大目に見られるべきである、と云う弁解が彼の心を揺さぶったのであろう。ラードヘーヤの失望は、スータブトラと云う理由のために差別、疎外される世間に対して効果のない闘いを挑むことの空しさを彼に考えさせた。二重の呪いを被り、自身の置かれた状況下で自身にとって最善であると判断して行為した結果、ラードヘーヤはこの世において、生きることの価値、闘うことの価値の何もないことを実感した。そのとき、彼は如何なる時にも自分への友愛を維持し続けている人物の居るところを目指して歩み始めた。彼はドゥリヨーダナの前に達したとき、私は全ての武器を学びました (ibid. 3.32) と。何故なら、彼は自分が学んだ学識が油断なく管理されたクル族の大宮殿の門扉の通行証になる可能性があったからかも知れない。

### 3. クル家に仕えたことがラードヘーヤの過失なのか

アディパルバン (Adiparva chap.135) によれば、ドローナはビーシュマ (Bhīṣma) とドリタラーシュトラ (Dhṛtarāṣṭra) の同意を得て自分の弟子らの勇気と修得した武芸の技術を王室の家族らや都の人々に、公開披露の競技会を開催していた。アルジュナ (Arjuna) の登場する前に、クル家のドゥリヨーダナとパーンドゥ家のビーマ (Bhīma) の鎚鉾の戦闘が繰り広げられた。両者共この武器を操る技に熟達しており、お互いに憎悪を抱いている者同士であった。彼らの戦闘は決闘の様相を呈し、戦闘が技の披露の域を越えて必要以上に激しさを増した。人々は各々の側に味方し始めたとき、ドローナは息子のアシュヴァッターマン (Aśvattāman) に彼ら両者を分離させた (ibid. 137.7)。そして、パーンドゥ家のアルジュナが紹介された。黄金の甲冑を纏い、右手に弓を携え、矢で充された矢筒を肩にくくり付けて登場する素晴らしい風采の彼を見た観衆は途方もない興奮の歓呼で沸騰した。クンティーは他の王子らよりも勝った自分の息子らを見守ることができて幸福であり、この美しく、逞しい若者アルジュナの母親であることを誇りに感じていた。アルジュナによって披露された見事な弓術に大衆が驚嘆と感嘆の坩堝に陥ったとき、人々は突然の雷鳴のように轟く騒音に驚か

され、人々の目は音の方へ向けられた (ibid. 137. 27)。アルジュナの試技は中止せねばならなかった。道は開けられ、何者かが近付きつつあった。神々しい男の景色に人々は仰天した。会場に響きわたった騒音は彼の弓弦の音であった。彼はラードヘーヤであった。手に弓を持ち、腰に剣を携えた、光に輝く甲冑と耳環を着け、背はシュロのように高く、獅子を殺すことができる美男子である彼は、競技場を見回してからドローナに近付き、表敬して後 (ibid. 138.6)、アルジュナに云った。私は貴方に挑戦するためにやって来た。貴方がこれまで公開してきた全技をそれにも増して実現できるし、貴方のグルが許可するならば、私は披露しましょう。ラードヘーヤはアルジュナが観衆に強烈に印象付けた妙技の全てを再現した。この侵入者ラードヘーヤが居なかったならば、アルジュナは完全な勝利者であった。アルジュナは屈辱と怒りに圧倒され、ユディシュティラ (Yudhiṣṭhira) はこの侵入者の勇気によって妨げられ、心が動揺する。ドゥリヨーダナはこの見知らぬ男に好感をもって接した。

自身の技を披露し終えたラードヘーヤはアルジュナに対して単独戦闘の挑戦を申し入れた。アルジュナは云う。招かれてもいないこの舞台に自分の勇気を誇示するために敢えてやって来た貴方が希望する道しかない (ibid. 138. 18)。これは競技だ。貴方の利益のために用意された個人的なものではない。それは万人の共有のものだ。クシャトリヤのダルマは何者でも自分の勇気を披露することを歓迎するのだ (ibid. 138. 19) と。この場面を彼ら両者の父、無限の光の神スーリヤと雷雲の神インドラは天空から見守っている (ibid. 138. 24, 25)。

幸せの唯中に居たクンティーは甲冑と耳環を着けたラードヘーヤが登場したとき、彼が自分が生み、河に流し捨てた子であることを直感したとき苦悩に襲われた。常に親切である自然は彼女を失神させ、暫くの間彼女に猶予をもたらした。過去と未来を見知る能力を所有するヴィドラ (Vidra, ドリタラーシュトラとパンドウの異母兄弟) は、彼女の過去の事情の全てを知るが、その件に関して他言しない。彼の介抱と計らいによって間もなく彼女は正気を取り戻す (ibid. 138.27&28)。二人の息子を見つめる彼女は肉体的苦痛と精神的苦痛に苛なまれるが、如何ともできない (ibid. 138.29)。両者の間に今にも一騎打ちの対決が始まろうとしたとき、ラードヘーヤの力量が何か程であるかを知らない、クリパ (Kṛpa) は、一騎打ちには双方の身分を明かし合うのが慣わしであり、アルジュナはクンティー妃とパーンドウ王の間に生まれた王子であるが、ラードヘーヤの家系と族を明かすことを求め、高貴な者は血統と身分の明かでない無頼漢とは戦わないものであると告げられた (ibid. 138.33&34)。そのとき、ラードヘーヤはそれを聞き赤面して意気消沈した。クル家の長子ドゥリヨーダナは彼が高貴の出でないと云う理由で一騎打ちが実現できないと云うのであるならば、アング (Anga) 国の王に任命する旨を申し出て、王就任の祭儀を完了させた (ibid. 138.37&38)。

ラードヘーヤとアルジュナの戦闘の開始が真近かに迫ったとき、自分の敷布を締めなく携え、所持品を吊り下げ、震え、汗を流しながら、老いたアディラトハが競技場へ入ってきた (ibid. 139.1)。彼に気が付いたラードヘーヤは自分の弓を置いて、彼の前に膝まづき、子が

親に為すべき敬礼をした (ibid. 139.2)。自分の両足を敷布の端で覆った彼、養父はわが子を腕で抱き、涙を戴冠式での灌頂で濡れている彼の頭上に落とした (ibid. 139.3&4)。その光景を見ていたビーマはラードヘーヤに嘲りの笑いと言葉を浴びせる。御者の子悴、家柄にふさわしく馬車の鞭を持つがいい。アルジュナの手に懸かって死ぬなどおこがましい (ibid. 139.6)。アングの領主などとてもない (ibid. 139. 7)、と。ラードヘーヤはこの暴言にも唇を震わせたが、啞黙って沈み行く夕日を見つめ、ため息をついた (ibid. 139.8)。

この場においてもラードヘーヤの出生の秘密について母親のクンティは明かさない。他にも既にそのことを知っているものもその場に居併せていたに相違ないと思われるが、それにも拘らず誰も明かそうとしない。ラードヘーヤの残念無念、悔しさは如何程であったろうか。しかし、彼は愚痴を云わない。何故にこれほどにまでラードヘーヤを無視する行為を、敢えてこの叙事詩の作者らは容認しているのか。

堪り兼ねたドゥリヨーダナはビーマに云い返した。

ヴィリコーダラ (Vṛkodara、即ちビーマの別称) よ、貴方はそのような言葉を云うべきでない (ibid. 139.10)。威力はクシャトリヤ階級の主要な徳であり、下位の生まれの男にさえも共に戦うに値する。諸英雄と諸河の源とは同様であり、両者のそれは常に不明である (ibid. 139. 11)。神グーハ (即ちKartikēya) の父親はアグニ (Agni) とも、キルティカ (Kīrtika) とも、ルドラ (Rudra) ともまたガンガーの息子 (Gaṅgāputra) とも云われ (ibid. 139. 13)、また諸武器を使いこなすものらの最高者である教導師 (Droṇa) は水の器、またゴータマの息子 (Kṛpā) は灌木の叢から生まれたと云うではないか (ibid. 139.15) と。諸々の英雄や諸々の河にとってその源、すなわち、生まれは重要なものではない。偉大な人の全ての出生について考えて見よ。それは常にはっきりしない。我々の教導師ドローナとクリパの出生について考えて見よ。貴方の父親の出生、そして、その事柄に対する私自身、そして我々の伯父ヴィドラのそれについて考えて見よ。また、貴方らの高尚な自己自身について考えて見よ。世間は貴方らが貴方らの母親の息子であり、そして父親 [Pāṇḍuの実] の息子ではないと云うことを知っている。貴方らは三者 (ダルマ、インドラ、ヴァーユ) を愛人にするにふさわしいと考えた女性 (クンティ) の息子らなのだ。貴方らのこの出生に拘る話を止さないか。この若者に関して、それは貴方の理解の欠落に対して哀れみを抱かせる。彼はクシャトリヤ階級に見られる、またクシャトリヤ階級のみの特質の全てを充している。貴方は太陽のように輝く虎が、か弱くておとなしい鹿からは決して生まれないと云うことを知るべきだ (ibid. 139. 16)。私は彼をアングの王に就任させた。しかし、私は彼がより偉大な名誉に価することを知っている。彼はこの全ての大地の主となるに価する (ibid. 139. 17)。貴方は彼がクシャトリヤであるに違いないと云うことを感じるができないのか。彼は偉大であるために生まれたのだ。貴方は彼を理解するに不十分であり、全く不十分なのだ。私は彼が何者であり、また彼が何処から出ているか気に懸けない。彼は英雄である。彼は英雄とし



て生きるだろう。それ故、彼の言葉は参集の人々から賞賛されたのだ (ibid. 139. 19) と。ビーマをはじめパンドゥ兄弟はこれらのドゥリヨーダナの言葉に反論できなかった。何故なら、それらの言葉は真実であったからである。

陽光は西へ消え、催しは終わった。ドゥリヨーダナとラードヘーヤの友情が交わされた。ユディシュティラは弓術においてラードヘーヤに同等の者がいないと云うことを見知った (ibid. 139. 25)。彼は今までビーマの威力とアルジュナの力でもってクル兄弟よりも優位であると考えていたことが、ドゥリヨーダナとラードヘーヤの協定は彼らの心の平安を乱し始めた。

#### 4. ラードヘーヤは夢に現れたスーリヤの進言を何故に聞き入れないのか

アルジュナの父親インドラは、アルジュナとラードヘーヤとの一騎打ちが不可避であると予見していた。ユディシュティラのラードヘーヤに対する脅威を見抜いたインドラはラードヘーヤはパールガヴァの弟子で、アルジュナよりも優れた射手であるが心配無用であり、自分が善処する旨の通信を彼に届けていた (Vanaparva 299.1&2)。しかし、ユディシュティラは誰にもこの件について云わない。

パンドゥ兄弟の追放拾三年目の或真夜中、ラードヘーヤの夢の中に、一人のバラモン (彼の父親スーリヤ・太陽の変身である。しかし、ラードヘーヤは彼が誰であるか知らない) が現れた。そして彼は云った。ラードヘーヤにパンドゥ兄弟の援護者であるインドラが明日の正午にバラモンの姿で現れて、貴方の耳環を請求するが決してそれらを彼に施してはならない (ibid. 300.11)。請求されたときには理に叶った言葉を繰り返し語ることによって、甘くて合理的な諸言葉でインドラの要求を退けるべきだ (ibid. 300. 15)。耳環を装着しているときはインドラの援助をもってさえも、アルジュナは戦闘において貴方を打ち負かすことはできません (ibid. 300. 17)。すなわち、耳環が貴方の耳から切り離された時には貴方の生命が短縮され、程なく死ぬだろう。甲冑は運命、それ自身を回避するための甲冑である。その二つの品は、神々の食料である神聖なアムリタ、即ち不死不滅の甘露に浸されていたものである (ibid. 299.20 ; 306.18&19)。もしも、貴方が自分の生命を大事に所有したいならばそれらの品を手放してはならない (ibid. 306.20) と。ラードヘーヤは云う。私に対して途方もない愛情をお示しくださり、またこのように私に話しかけている貴方は一体誰なんですか。お聞かせ下さい (ibid. 299.21)。彼は自分の繁栄を大変心配してくださっている相手、このバラモンは誰なのか。彼は答える。私は百の光線を所有する神、太陽であります。愛情を抱いている私の進言は貴方にとって非常に有益であり、そのように行為してください (ibid. 299.22) と。

スーリヤのラードヘーヤへの思いは、貴方に途方もない愛情を抱いている私は貴方が諸敵に騙されるのを望まないからであり、私の云う通りに実行して長生きしてほしいと希望する

のである。しかし、ラードヘーヤのこれまでの生活経験において、これ程の愛情を自分に示してくれる人は彼を養育してくれた養父母と、もう一人、武芸修得披露の競技場でのピーマによる侮辱の言葉によって直面させられた屈辱的窮地から彼を救出してくれたドウリョーナのほかにはいない。彼自身がいま、ここに生存する理由は彼らを喜ばせたいためにであり、この世に存続する自身の生命に固執する如何なる未練も魅力もないと云うのである。

ラードヘーヤは彼自身の人生論を次のように述べる。私は貴方（スーリヤ）を私の神に選んでおり、他の如何なる神にも表敬しない。貴方は私のイシュタダイヴァ（iṣṭadaiva）である。私は人の世で貴方に会えたことを幸せに思う。貴方はインドラについて忠告するために訪れてくれた私の援護者である（ibid. 301.4）。貴方は私に、この二つの品を放棄しないように望んでおり、それらの品は私の大切な生命を意味すると云う。貴方は私が実施している＜誓い＞の日々の証人である。貴方が天頂に達したとき、私は貴方を礼拝する。その礼拝が終わったとき、私に請求された全てのものを懇請者らに施す。貴方はこの幾年もの間、この儀礼をご覧になって来た。私はスータプトラと云う名称が自分の名前に纏わりついた恥辱汚点であることが解ったとき、この＜誓い＞を採った。私はたゆまぬ努力によって知識と名声と清浄を獲得した。そして射手らの最高者（即ちパールガヴァ）から弓術を学んだが、私がスータプトラであると云う事実から空しいものになった。しかし、私が実施しているこの＜誓い＞は多大のプンヤ（清浄）をもたらしした。それは私が長い間経験できなかった平安を私に与えた。私は施しをするとき幸福であり、私にとって大切なものは幸福である。もしも、求められれば自分の生命でさえも放棄する用意がある。それ故、明日、インドラが諸々の品を私に懇請しに来るならば、たといパーンドゥ兄弟に利益をもたらすことであり、私の生命に関わるものであっても、この生命に執着していない私は、それらを施し与えてしまうことを気に懸けていない。いまの私は名声だけを望んでいる。生きながらえるためにそれを放棄することを望まない（ibid. 299.25～27）。インドラに施与することを拒否したならば、私の名声は瞬時に霧散消滅してしまうだろう。インドラへの施しを拒否して生き長らえたとしても不名誉が付きまとう。私が切望している名声は施与者ラードヘーヤである。天界の神々の主である彼インドラが懇請者として私の処へやって来るのであるならば、如何なる懇請であろうとも彼に施すことが果報である。彼はパーンドゥ兄弟を愛しており、彼ら兄弟に利するために私の威力を奪取するために試みるだろうが、私は少しも頓着しない。運命の選んだ標的が私であり、運命の陰謀の全てが私、ラードヘーヤの敗北とアルジュナの勝利であることを私は知っている。私は自分が勝利しようがしまいが、自分自身に試みた義務（ダルマ）の道から逃れたりしない。この世の生類はインドラの恵み〔の雨〕のお蔭で生存しているものであり、その最高の施与者から懇請されてそれを叶えることは私にとって光栄なことである。私は自分の生命よりも名声を愛する。名声を切望する人は天界に行く（ibid. 299.34）。悪評は全滅を意味する。私はこの好機を無駄にしない。自分の能力の最前を尽くして戦を闘

い抜く。そして私は戦場で死んだ者らに予定された天界へ到達するだろう。自分の生命を犠牲にしてさえも自分の名声を護りたい。それ故私はインドラに求められる物を何でも施与するだろう (ibid. 299.35)、と。ラードヘーヤの意志は堅固である。

『マハーバーラタ』の作者らは、スーリヤには自分の身分を明かさせない。即ち、ラードヘーヤに対して、父親であると告白できないように杵付けをしてある。

彼は苦慮しながら、ラードヘーヤに云う。私は貴方をこよなく愛している。愚かなことをしてはならない。貴方は自分の妻子の幸せを捨てるのか。戦の勝利が貴方に依存している友達のを捨てようとしている。貴方は確かに名声を獲得するだろう。しかし、貴方が、生きていて楽しめない名声の効果とは一体何なのか。貴方の肉体が燃えて灰になるとき、貴方がこの世において拘り、切望した名声の効果は何なのか (ibid. 300.2)。貴方は自分に注がれるに違いない賞賛をこの世で聞くことはできないのだ。貴方は私を常に愛したし、私もまた貴方を愛した。この我々の愛と云う名称のもとに、私は貴方に云う。パーンドゥ兄弟に大切な生命を与えるようなことをしてはならぬ。私は貴方の差し迫った死への考察を覆させたい理由を告げたいのはやまやまであるができないのだ。私はただ貴方に神によって着けられた甲冑と耳環を施与しないように希望する。それを貴方に与えた神は自分の生命のように貴方を愛している。ラードヘーヤよ、アルジュナを殺ることは今までの貴方の生涯の唯一の願いであったではないか。貴方がそれら二つの品を所有しているならばそれを可能にするし、それらを貴方の身から離さなければインドラをはじめとする神々さえも貴方に如何なる妨害もできないのだが、離してしまえば脆弱な者になってしまう。アルジュナを殺ると云う願いを叶えたいならば、大切なドゥリョダナを喜ばせたいならば、明日インドラの懇願を叶えさせてはならない。スーリヤの愛情に満ちた説得の言葉はラードヘーヤを圧倒した (ibid. 300.15～18)。しかし、彼は自らの決意を翻すことはなかった。彼は云う。法令儀軌によって是認せられてあるバラモンらに正しく施与することによって、自分の身体に生来賦与されてあるものを施与することによって永遠の名声を獲得するだろう (ibid. 299.35)。私は死の恐怖を抱いたことがない。最も恐れているのは不正 (不正直) であり、私は自分を偽ることができないし、自分の実施している<誓い>に拘らねばならない、と。スーリヤは彼に次の言葉を残して、彼の夢の中から立ち去る。貴方を公明正大の道から誰も動かせることはできない。貴方は、ダルマを放棄するよりも死を選ぶだろうもう一人の人物ユディシュティラよりも更に偉大である。私は貴方が誇りである。インドラに貴方が自分の甲冑と耳環を施すときは、貴方に諸敵を滅ぼす確実な鍔、彼のシャクティ (Śakti) を与えることを要求せよ (ibid. 301.15)。この条件が充されるとき、その鍔は貴方がカヴァチャとクンダラを失ったことを埋め合わせる可能性をもっているだろう (ibid. 301.16) と。このラードヘーヤの夢の中のスーリヤとの会話に見られる彼の見解がこれ以後の彼の身の処し方の運びを明示している。

## 5. 耳飾りと甲冑のインドラへ寄進はラードヘーヤの過失なのか

ラードヘーヤは正午のスーリヤへの礼拝を終えた (Vanaparva. 308.23)。その時一人のバラモンがやって来た。彼はバラモンに表敬して、望みのものは何かを尋ねた。その時バラモンは云った。私は他のバラモンらが欲しがるといふものは要らない、と。ラードヘーヤは微笑んだ。貴方の請求は奇妙である。この二つの品耳環と甲冑は私の身体から離せない (ibid. 309.10)。私は貴方がやって来る前から知っていた。シャクラ (Śakra、インドラの別称) よ、貴方に対して恩恵を無益にすることは私にとってふさわしくない (ibid. 309.14) と。彼はバラモンに二つの品を身体から切り離し、施与することを決意する。しかし、それらの品はスーリヤから彼に生命を受け、死から護るために身につけられたものであり、身体から切り離すからには生命を保証する補いの品を考えるべきであり、そうでない場合はそれらを請求した貴方も嘲りの対象となりかねない (ibid. 309.16) と。インドラはヴァジュラ (vajra、雷電) 以外の武器で代替品を受け入れた。ラードヘーヤは微笑んだ。

インドラは、インドの神話の世界では全ての施与者らの最高であり、大地は自身の生命、財産において貴方の恩恵に依存している。諺に、施与においてはパラジャンヤ (Parajanya、インドラ) のようにと云われている貴方が私に懇請されたとき私は困惑した。我々死すべきもの (すなわち、人間) に頼みを受けるのは貴方の特権であり、貴方は神々の主であり、貴方は私が自身を護るこれらの品を貴方に施与することによって自分の本当の生命を施そうとしていること (すなわち、自己犠牲) をよく知っている。私は偉大なインドラが私からの施物を受領してくれることに満足し、光栄であり、自分の生命を貴方に施すことを誇りに思う、と彼は自分の身体から甲冑と両耳から耳環を切り離してバラモンへ施与した。

自分のダルマ (正義) のために自身の生命を施与、供犠したと云うことは彼にとって無上の至福であったのである。それ故、私はそれらを貴方に施与する。私が施与に対する貴方の返礼の品の受領は適わしくない。それでは本当の施与者にならない。それ故私は貴方に請求をすることにした。何故なら、アルジュナへの貴方の愛情であったとしても、パーンドゥ兄弟への加勢のために、貴方は変装まで試みて、誰人によってさえも是認されないであろう行為を実行し、即ち、私の生命を犠牲にすることを求めた。貴方はこの地上界と天界で最高の施与者である。その貴方は私が常に遵守している原則、懇願するものの誰にでも否と云わない私に対して請求したのである。世間の非難から貴方を救出するために、私は貴方に懇請しよう。私はこの出来事のために世間からの貴方への非難を回避したいのだ。それ故、貴方の武器を私に与えることを要求する。それは甲冑と耳環を失った処へのある程度の埋め合せになるだろう。その時、世間は云うだろう。インドラはラードヘーヤからこれら二つの品を取り上げたが、そのお返しに自分の武器シャクティ (Vaijayanti śakti) を与えたと解し、貴方

は高潔な心を持った人々の非難を逃れ得るだろう、と云うインドラへの配慮がラードヘーヤの側には読み取れる。彼はこの時、諸天界の王、インドラをも超越したと云うのである。

これら二つの品を切り離すとき生じた諸傷、醜悪から貴方の身体に無傷を受けよう (ibid. 309.31) と、インドラはラードヘーヤの不安と心配を取り除く。そして、彼に一つの武器を貸与した。インドラの貸し与えた武器はただ一人の敵に対して用いてもよく、狙い定めた如何なる敵も必ず倒すが、一度使用したならば彼の手元へ返ってしまう (ibid. 309.25) と云う付帯条件が付けられた。しかし、彼は唯一人の敵との合戦にその武器が必要である (ibid. 309.26) と。彼の云う唯一人の敵がアルジュナを意味することを知っているインドラは云う。アルジュナは想像を絶するナーラーヤナ (Nārāyaṇa) と称されているクリシュナによって護られている (ibid. 309.28)。すなわち、その限りでは、インドラの武器でさえも彼を殺害することはおぼつかない。[ヴィシュヌ] 神の権化であるクリシュナはパーンドゥ兄弟を護るために自身に従事させられてあり、ラードヘーヤの威力は彼の前では功を奏し得ないのである。それにも関わらず、彼は、勇敢な人を打ち破る絶対に確実な鎚をインドラに要求した (ibid. 309.29)。

しかし、インドラは抜け目ない。絶対に自分の不利を生じるような対処を試みていないのである。貰い受けたラードヘーヤの品々は彼自身を取り外さない限り有効であり、彼自身の身体を防護するもの・装身具である。生身の身体をもち、戦士として勇猛果敢に戦う勇者を自認しているラードヘーヤにとって、絶えず身の危険に晒されている。その場合、如何に必殺の力を秘める武器であろうとも唯一度の使用しかできないものは大した有効度を持たない。ラードヘーヤの品々は如何なる場合にも彼の身体を必ず護り通すものであり、生命を失わせない防具である。どちらが有効か論を待たないだろう。唯一度しか使用できないその武器ではあったが、彼は頓着しなかった。未だ、彼には戦に勝利する望みがあり、アルジュナを殺る望みの武器を入手したと云うのである。しかし、彼の心境は多分自分は欺かれるだろうが気にかけない。耳環と甲冑を欠いていても最善を尽くすことが全てであり、この際、彼に取ってアルジュナとの戦における勝負は大した重要な事柄ではない。何故なら、このインドラから手渡された武器は、いとも簡単に全く別の目的に使用されたのである。

すなわち、クルクシェートラの戦十四日目、日没しても戦闘はおわらず、ビーマがアスラ (asura) 族の女性に生ませたガトートカチャ (Ghaṭotkaca) と彼の率いる軍が夜行性を幸いにドローナの率いるクル軍を猛襲し、ドゥリヨーダナが意気消沈しているとき、クル軍兵士らの懇願に心を動かされたラードヘーヤによってインドラの武器はガトートカチャに向けて発射されたのである (Droṇaparva 180)。クル軍の窮地を一時救出することはできたが、彼自身の身を護るための強力な武器はなくなった。

ラードヘーヤの<誓い>即ち、自己犠牲、施与の行為に徹することは、彼の他者に対する寛容さを示すと同時に、彼が自分の運命を超克できた人間として永遠の名声を獲得したこと

を意味する。そして彼自身はインドラにも増して最高の施与者であると末裔によって思い出されると云うのであろう。

一方、彼自身の生存の確保と云う観点から見ると、その性質は自身を全く無防備にさせてしまうと云う弱点をさらけ出す。彼の実施する〈誓い〉の行為は彼自身の凡愚性、過失であり、自業自得とでも云うのか。この辺りを突いて、アルジュナの父インドラが、この現実世界に変装して出現し、欺き行為を用いて我が子の安全のために奔走したのである。勿論、アルジュナ自身がインドラのそうした試みを知っているわけではない。ラードヘーヤの父スーリヤは現実世界に登場することなく、夢の中で忠告する程度に処理してある。ラードヘーヤは自分の境遇に何一つとして不満を漏らしていない。すなわち、そのことは肯定されていると云うことである。

## 6. ラードヘーヤの出生の真相が万人に公開されない

ラードヘーヤ自身が自分の出生の秘密を聞き知らされたのは、それから暫くしてのことであり、そのことは万人に知らされてはいない。パーンドゥ兄弟の長子ユディシュティラがラードヘーヤの出生の秘密を知るのはクルクシェートラの戦が終結して、戦没者の追悼の祭儀を執行するとき、母親クンティーから彼の兄であるラードヘーヤの冥福を祈るために水向けを望まれたときであった。全く自分の知らぬことであったとは云え、長兄の殺害者としての嫌悪感に襲われて苦悩している彼ユディシュティラに、ことの真相をナーラーダ (Nārāda) 仙によって述べ聞かされたとして処理されてある (Śantiparva chap.1)。

時間的経過からすれば、それより以前にビーシュマはナーラーダ仙からラードヘーヤの出生についての経緯を聞き知らされていた。それはクルクシェートラの戦の十日目、クル軍の総指揮官ビーシュマがクリシュナの奸智の一策によってアルジュナの矢に射られたことを聞き知ったラードヘーヤが、彼のもとに駆けつけたときラードヘーヤの出生の秘密が語られる (Bhīṣmaparva 124.9&10)。また、彼の出生について早くから知っていた人物はヴィドラである。彼はドローナの門下生らの修得武術の披露の競技会場にラードヘーヤが突然に現れてクンティーの気絶した (Adiparva 138.28) とき、彼女の介抱をして正気を取り戻させている。彼は有能な人物であり、彼の透視術によってその真相を知る機会をもっている。しかし、定かではない。

しかし、ラードヘーヤ自身はクルクシェートラの戦の始まる直前における戦回避の方策の働きかけの中でクリシュナ、クンティーらによって知らされていた。すなわち、クリシュナはドゥリヨーダナとパーンドゥ兄弟との和解説得の失敗に終わり、ウパプラヴァへ返る直前にラードヘーヤの実力を熟知しており、パーンドゥ軍に引き入れるための工作を試みた (Udyogaparva chap.140~143)。そのときクリシュナは、クンティーの秘密をラードヘーヤに告げている。

貴方は善良な人であり、今日までダルマに忠実であるが、何故にドゥリョーダナを支持するのか、諸ヴェーダと諸補助学に精通しており、諸聖典の全てを征服しており、正義の大切な心を知っており、非常に沢山ある、その微妙な諸相を所有するダルマを知っておりながら、貴方は何故罪深い行為を実行するのか、と云うクリシュナは問う。これに対してラードヘーヤの云い分はどうであろうか。関連する叙述部分を総合して見ると、次のような見解が導き出され得よう。すなわち、確かに正義の人は罪深い者と側を異にするべきであることを容認するラードヘーヤは云う。ドゥリョーダナは違う。私は愛しており、彼に対する評価は他の人のそれとは異なる。世間は、私をスータプトラであると白眼視した。彼は私よりも上位の階級人でありながら一度もそのことに拘らない、と。そして、彼は幾年か前にハスティナーブラで行われた競技会の出来事が全てであった。貴方が愛するパーンドゥ兄弟に私が侮辱されているとき、私を擁立してくれたのがドゥリョーダナであり、私をアングの王に就任させた。我々は手と手を取りあった。彼の王者らしい振舞いへの返礼に私の為すべき行為を彼に要請したが、彼は唯、私の友情が欲しいと云った (Adiparva 138.40)。その出来事から幾年かが経過して私の主人は地位を固めたが、しかし私の心は常に彼王と共にあり、自分を愛する唯二人、ドゥリョーダナと母親ラーダーを喜ばせるために生きており、自分の生命に全く魅力ありません。生きている限り、私の心は彼ら二人に帰属し、彼らのためにだけある、と。暫く沈黙を保っていたクリシュナは彼を見つめて云った。感謝の負債は返済が最も難しいものだ。ラードヘーヤよ、貴方は自分の出生について知っているか、貴方は自分が誰であるかを知っているか。貴方は自分の母親を知っているか、と。彼はかつて夢の中に登場した出来事を告げた。クリシュナよ、私は本当に悔いはない。私は愛らしくて、愛する一人の母親があり、彼女に好意を抱かないものはいない。私は彼女を誇りに思っている。何故に、いま私の出生や母親の話を持ち出されるのか (ibid. 143.2)。それは遠い過去に死滅しており葬られていることである、と。

クリシュナは慈愛に満ちた声で云う。貴方の云うことは正しい、と。そのとき、彼はラードヘーヤにクンティーの秘密を告げている。ラードヘーヤは尋ねる。私の父親は誰か？ クリシュナは答える。貴方が毎日礼拝している神、貴方が自分のイシュウタダイヴァとして選んだ神が貴方の父親である、と。ラードヘーヤは気を失う。正気を取り戻した彼は云う。実に、私は全ての存在者の中で最も不運な者である。スーリヤが父親であり、偉大なクンティーが母親である。五人のパーンドゥ兄弟、高潔なユディシュティラ、強力なビーマ、騎士道的なアルジュナ、美男ナクラ、そして賢明なサハデーヴァは全て私の兄弟であるのだ。これまでの長い年月の間私はスータプトラであった。パールガヴァは自分の心眼で私が誰であることを既に知っていたに違いない。そのことが彼が私を呪った理由であるのだ。神よ、パーンドゥ兄弟が私の兄弟らであるなどどうして考えることができようか、と。

彼の両目から涙が溢れ、止める術もなかった。貴方はこの最近の幾年かの間、この真相を

知っていたに違いない。何故にいまに至って全てを私に告げるのか？ 無知は至福であったのに。この幾年の間私は自分の母親が誰であるのか知りたくて過ごして来た。いま、貴方は何故に私に告げるのか。私はパーンドゥ兄弟を嫌悪していることが大いに幸せであったのだ。いま、貴方がやって来て、私の精神的均衡を逆転させたけれども、貴方は何故にそれを実行したのか。自分の行為に対する理由を持っているに違いない (ibid. 143.2)。何故、と。

クリシュナは云う。私は確かな死から貴方を救出したい、貴方を生かしたい。貴方はダルマ（法規、正義）を全て知っている。乙女の頃に生まれた息子は法的には彼女が結婚した男性の息子であると云うことを知っている。従って貴方はパーンドゥ兄弟であり、長子である。貴方は父方においてパーンドゥ家であり、母方において私の親族であり、私の従兄弟であり、ヴィリシュニである。私と一緒に来なさい。ユディシュティラの処へ行こう。貴方の兄弟らは貴方の足元にひれ伏すだろう。パーンドゥ兄弟を支援するために集まった諸王らはパーンドゥ兄弟の長子として貴方を表敬するだろう。貴方は彼らの王として彼らによって王位に就けられるだろう。そして、貴方の座席に貴方を引き上げるだろう。黒くて、美しいドラウパティーは貴方に帰属するだろう。何故なら、貴方はパーンドゥ兄弟であるからだ。ユディシュティラは貴方にしがたって戦車に乗って来るだろう。力強いビーマセーナは貴方の頭上に日除け傘をかざし、アルジュナは貴方の戦車の御者となり、馬の手綱を取るだろう。ナクラとサハデーヴァと私は貴方の戦車の後方を歩き行くだろう (ibid. 140) と。ラードヘーヤはクリシュナの目を長い間じっと見つめていた。そして、彼は云う。貴方は私への貴方の愛情の基に私の兄弟について私に話された。確かに私は法的にはパーンドゥ兄弟である。しかし、彼女は私を捨てたのだ (ibid. 141.3&4) と。ラードヘーヤは母親が自分を生み落としたことを恥じ、彼女は自分を箱に封じ込めて河へ流し捨てたが、御者のアディラタはその箱を拾い、家へ持ち帰って妻のラーダーと共に養育してくれた。彼女は自分の乳房を私の口に含ませたり、また私の尿便の世話をしてくれた (ibid. 141.6) のだ。ドゥリタラーシュトラの一族でドゥリヨーダナのお蔭によって拾参年の間、平和にアンガ国を統治でき得た (ibid. 141.13)。それ故、クリシュナの彼への勧誘は有難いことではあるけれども、ドゥリヨーダナに反旗を翻すことはできない。彼にはクル軍の惨敗と彼自身の死を暗示させている。彼はかつてパールガヴァのもとでバラモンの教育を受け、その奥義をものしている人物なのであり、予見する能力を体得していたと考えることは充分考慮に入れて置くべきことであろう。クリシュナに彼は云う。あなたはサヴィヤサーティン (Savyasācin, アルジュナ) によって殺される私を見ると、私との戦にクンティーの子らを導きなされよ。ケーシャヴァ (クリシュナ) よ、常に会話の秘密を維持しながら、敵を滅ぼすものよ、と。表面上はクリシュナの労も不成功に終り、空しくパーンドゥ軍の駐屯しているウパブラヴィヤ (Upapraya) へ帰って行く。しかし、結果的にはクリシュナの試みはラードヘーヤを彼の画策の掌中へ引き入れたのである。



ラードヘーヤは生まれるとすぐに河に捨て流されたが、アディラタ夫妻に立派に養育され、凛しい勇者に成長し、クルー族でも屈指の人材の一人である。ここにおいて彼一人に対して彼の両親を明かすと云うことは彼にとって如何程の意味を持つというのか。彼の身の証は彼一人の処、証人の不在の処で公表されて見たところで、それは密室の出来事に留まり、彼自身が他者に対して彼の身分の証にはなり得ない。それが、クルー族、パーンドゥ一族、各々の盟友らの居並ぶ大衆の面前での公開であれば、彼にとって身の証として公認のために、それなりの意味づけは可能になったであろう。しかし、ことはそのようには進められていない。血縁関係に依存した説得論法でのクリシュナの言葉にしてもどうであろうか。

言葉は誰の言葉であろうが、空間を介して音声で他者に伝えられ、聞き取られ、空間に吸い取られ、消え去ってしまう。証人の不在のときの口約束が如何程に効力を発揮できるものか。パーンドゥ兄弟の長子であれば必ず王位が保証させると云う証はどこにあるのか。またクリシュナはドラウパディーを他の兄弟らと共に、共有する妻にすることができると云うのであるが、彼はそれ程に彼女を妻にすることを切望しているのか。血縁、兄弟の関係における形式論にはラードヘーヤの人格的存在としての視点を突破できる威力は秘められていない。

いま、クリシュナの説得に対するラードヘーヤの主張、立論について考察を進めてみるならば、次のようになるだろう。ドゥリタラーシュトラの一族のもとでアング国の統治者として処遇してくれているクル家に反旗を翻すことを勧誘する貴方クリシュナよ、仮に、私を貴方に同意させた場合、この私自身の人格と人生を恥晒しにすることであると云うことが解って、勧誘しているのか。この私が如何に嘲笑され、罵られようとも貴方自身の世間における人生には何ら関係のないことであると云うのであります。このような見解に立脚しない限り、私自身の立場と尊厳も全く考慮されていない発言が私に向けて発せられる筈がない。

仮に、彼がクリシュナの勧誘に応じた場合、クリシュナの指揮のもとでクル軍、クルー族が殲滅してしまい、彼ら一族が滅亡した状態を獲得したと仮定したとしても彼がクルー族に反旗を翻したと云う事実は消し去ることはできないことであり、その裏切り行為の事実は語り伝えられることになる。その不名誉の責任は誰か背負うと云うのか。

クリシュナの勧誘に対するラードヘーヤの対応を、このように読み取ることはあながち曲解とは云えないだろう。彼はクルー族の社会で生活をし、活躍をする空間を確保しており、そこに彼自身の存在価値を見いだしてきている人物である。その彼を敵対するパーンドゥ軍に引き抜くと言う行為が何を意味するかを考えてみれば自ずと明らかになるだろう。この期においてすら、クリシュナの言葉の中には彼の身分の確かさを公開して行く気配すらない。

## 7. ラードヘーヤにとってクンティーの言葉の空しい

何とかして戦を回避し、平和的解決を望むヴィドラはクンティーに便法がないものか問う。

彼女はラードヘーヤを説得するために出かけ、ガンガー河岸で東方に向かって祈禱している彼に出会い、自分が母親であることを告白する (Udyogaparva chap.144～146)。彼女はラードヘーヤとアルジュナが力を併せれば、この世で不可能なことはない (ibid. 145.10)、父親であるスーリヤもまた遠方から母親の言葉に従うようにと云った (ibid. 146.2)。しかし、彼は自分が生まれてすぐに母親に捨てられた身であり、今日まで母親から母親らしい言葉を聞かされたこともない。彼が本来、クシャトリヤであるにも拘らず、身の証を誰もして貰えないままにスータヴァンシャとして処理され、パーンドゥ兄弟からは数多の屈辱を受けさせられ、苦渋を味わわされて来た。そうした中でドゥリヨーダナの友情とクル家との信頼関係を思えば、これを裏切るわけには行かない。彼の心境を次のように述べている。以前に兄弟であると知らされておらず、戦の前夜にそのことを知らされた私は、自分をクシャトリヤと呼ぶであろうけれどもパーンドゥの兄弟の側に行けますか (ibid. 146.10) と。かりに、パーンドゥ兄弟に荷担したならば世間は何と云うか。自分がアルジュナを倒すか、アルジュナが自分を倒すか、自分はそれまで戦い抜くだろう。アルジュナ以外の四人の息子らが挑んで来ても如何なる場合でも決して殺さない、五人のパーンドゥ兄弟は必ず確保されると云うことを彼女と約束をしている。つまり、ラードヘーヤかアルジュナの何れかが生き残り、他の四人と併せて五人の生存が確保されると云うのである。

クリシュナとクンティのラードヘーヤへの勧誘と説得もクルー族の中で育まれた彼の価値観を覆させるだけのエネルギーを持ち合わせていなかった。何故なら、彼ら両者のラードヘーヤへの試みの論点は彼自身が人格的存在であるとする無視し、彼と生母クンティとの血縁関係に依拠したものであった。しかし、血縁関係に依拠した説得は彼ら両者の関係を直視してみれば論を要さない、彼女自身の矛盾なのである。そのことをラードヘーヤはしっかりと指摘するのである。

クンティのラードヘーヤ説得の言葉の結論は、＜何れの道を行こうかと迷うたときには両親の喜ぶ方の道を選ぶべきであり、それが聖典に説かれている最高のダルマである＞と云うのであろう。ラードヘーヤは彼女の言葉の自己欺瞞を突く。彼女の云うことはダルマではない。生み落した嬰兒を河に捨て流したとき、彼女は彼からその当時、既に認知されていたクシャトリヤとしての社会的権利の全てを強奪してしまっておりながら、いま、彼女は彼にクシャトリヤの義務を果たせと云い、母親の愛情こそは生涯の幸福であるにも拘らず、彼に対して彼女は無慈悲にも拒絶してしまっている。彼を除いた彼女の息子らの利益のために、彼に自己犠牲を強要していることに彼女自身が気付いていないと云う、彼女の見解への彼の批判は正解であるだろう。しかし、彼は、この彼女の要求を無視しようと試みてはおらず、クシャトリヤとしての身の処し方を懸命に守るべく努力をしているのである。彼女の胸中は彼の言葉からその思いを読み取ると複雑な感情が往来するが、彼女は程なく敵方になる、最初に自身が生んだ児である彼を言葉なくしっかりと抱きしめて、その場から離れて行

った。誰人たりとも運命に逆らうことは叶わないことである。しかし、彼はアルジュナの他の四人の息子は殺さないと云ってくれており、それで充分であるし、神よ、彼を祝福して欲しいと云う思いを抱きながら自分の家に帰る。

## 8. ラードヘーヤは自身の正義を通す

自分を捨て流した母親が名乗りでたからと云って、養育してくれた親の価値、有難さ、尊さが消え失せてしまうと云うものではあるまい。ラードヘーヤの場合、生みの母親からは迷惑がられこそすれ、愛情の言葉を面前に聞かして貰った記憶もさらさない身である。彼に対して捨てた母親が悔恨と懺悔の言葉の数々を吐露したとしても、それは自己弁護、弁解の他の何ものでもない。そして、それは弁解者自身の自己欺瞞に他ならない。彼は云う。貴方が私に対して採った行為は非常に罪深いものであり、そのことによって私の名声、名誉の破壊の状態が継続されて来たのだ (Udyogaparva 146.5)。クシャトリヤの生まれである私はそれにふさわしい諸儀式を得ていません。それは全て貴方の諸行為のためであります。如何なる敵がそのような重大な侮辱を私に対して為すことができようか (ibid. 146.6)。そのとき、私に対して示されるべき如何なる慈愛をも示すこともなく、自分の都合のための好機がやって来たとき、正当な諸儀式を私から奪ったにも関わらず私に対して強要するために貴方はやって来た (ibid. 146.7)。ラードヘーヤの云い分を省みれば、自らは多分、クシャトリヤの生まれであることに気づきながらも今日まで公に身の証をしてくれることもないままに、スータヴァンシャとして処遇され、パーンドゥ兄弟からも数多の屈辱を囁まされて来ている事実と血縁関係の親近性の隔たりの溝のただ中で彼は彼自身の正義を維持する。実母であると告白された現在ですら、彼の身の証は万人に公開された事柄となり得ていない。しかし、そうした屈折した複雑な心境の彼はクンティーが母親であること、ユディシュティラを始めとするパーンドゥ兄弟が自分の身内であることを拒否している訳ではない。自分を捨て流した母親であっても、その胎内から生まれ出てきた身である。彼はその血縁と云う絆を無視しようとするのではなく、肯定している。その思いは彼の他との関係の中でパーンドゥ側から是認されない自身の存在であることも自認していることから明かである。彼はパーンドゥ側から否定される存在であることをクリシュナとクンティーの言葉の中から読み取って身の処し方を明らかにしている。彼はパーンドゥ兄弟五人の中に生き残って入り込める存在ではないことをクリシュナとクンティーに伝えたのである。彼は彼自身に与えられた諸条件の中で活路を見いだして成長して来た人物である。クルクシェートラの大戦の回避のクリシュナによって試みられた彼への説得に際しての会話において、彼は自らの出生・身分関係をパーンドゥ兄弟に秘密にしておくことを要求している (ibid. 141.20)。彼は云う。クリシュナよ、私がパーンドゥの息子らに云った粗暴かつまた厳しい言葉はドゥリタラーシュトラの息子 (ドゥリヨーダナ) の喜びと満足のためであり、いま、私は悔恨自責に撃たれている (ibid. 141.

45) と。たまパンドゥ兄弟と対立関係にあるクル一族の傘下で生きる彼は、主君ドゥリョーダナとの関係においてクシャトリヤとして、勇者として主君に忠実な生涯を全うするために、クル軍の戦士で果てることを誓う。彼は勇者であり、アルジュナやクリシュナとの戦闘を決して恐れてはいない。ただ、彼の脳裏にはバラモンの呪いの蔭がちらついている (Karna-parva 42.36~43)。

## 9. ラードヘーヤの戦死

カルナパルヴァン (Karna-parvan 90~96) によれば、クルクシェートラの戦の第十六日目、正攻法でドローナに打ち勝つことは至難の業であることを知るクリシュナの虚偽行為の進言に、アルジュナは一時は身を震わせたが、その言葉にしたがってドローナへの奇策、彼の息子アシュヴァッターマンが戦死した、と嘘の情報を流して彼に戦意を喪失させ、戦車の床に坐を組んで瞑想に入った彼の首をはねさせると言う背任行為の責任は全てクリシュナ自身が負うと云うのか。そこには、生存のためには手段を選ばない、生存即勝利であり、そのことが如何なる種類の行為であろうとも正当化が可能であると云うのか。生存が全てであり、それが正義を導き出すための基点であるとして是認されることは容易であると云うのか。しかし、そこには若干の無理、詭弁的、恣意的な要素の内在を伺わせているように思われる。

パンドゥのもう一人の妃マードリー即ち、サハデーヴァ (Sahadeva) とナクラ (Nakula) の母親の兄、マドラの王、シャリヤは不本意にも些細な勘違いからドゥリョーダナのクル軍に荷担することとなり、ドローナの死後、クル軍の総指揮官にラードヘーヤが任命され、またその戦車の御者として彼シャリヤが登用された (Karna-parva 35. 31)。彼らはアルジュナの居る戦場へ向かう。そして、ラードヘーヤとクリシュナの助言を頼りにアルジュナの壮絶な戦闘が始まる (ibid. 89)。そのとき、ラードヘーヤはバールガヴァから学んだブラフマーストラの発射の呪文を思い出そうとしたが彼の予言通りに最も必要なときにそれを思い出せず、彼の命運はここに尽きる (ibid. 90.80~83)。ラードヘーヤの命運は容赦なく彼の身邊に差し迫り、仙境で牛を殺して受けたバラモンの呪い、身分を偽ったために受けたバールガヴァの呪い、この二重の呪いは危機一発の臨戦下で戦車の輪を血の濁みにめり込ませる。ラードヘーヤは戦車から飛び降りて車輪の脱出を計るべく、力の限り持ち上げるが全く動かない (ibid. 90.102)。そして彼はアルジュナに戦のダルマに則って戦闘を試みたい旨を伝える (ibid. 90.106~112)。すなわち、おおパールタ (Pārtha、アルジュナの別称) よ、私が車輪を救出するまでの間暫く待ってくれ (ibid. 90.106)。勇敢で誠実な英雄な、振り乱した髪を所有するを所有する人に自分らの諸矢をその言葉に躊躇の思いをよぎらせたアルジュナに、すかさずクリシュナの言葉が発せられた (ibid. 91. 1~14)。この期に及んでダルマに則った行為を口にしたラードヘーヤはドゥリョーダナのもとでパンドゥ兄弟に浴びせかけてきた侮辱的行為の数々をクリシュナによって告発されたが一言の反論もできぬまま、自由を失っ

た戦車に乗り込んで弓を執りアルジュナに矢を放ち、命中した矢の衝撃で彼が目を回している間に再び車輪の脱出を試みたが、微動もしない (ibid. 91.31)。クリシュナは叫ぶ。彼が自分の戦車を整える前に君の怨敵の頭を切断せよ (ibid. 91.32) と。クリシュナの催促に、アルジュナの心は動揺した。彼の手は戦士としての道を逸脱した行動をすることに戸惑うが、クリシュナの進言を受け入れて矢を射てラードヘーヤの首を切り落とした (ibid. 91.50&51)。

クリシュナが、ラードヘーヤに対してパンドゥ兄弟に浴びせた侮辱と云うことを徹底して糾弾すると云うのであるならば、彼に対して発せられたビーマの嘲りの言葉、御者の小悴、家柄にふさわしく御者の鞭を持つがいい。アルジュナの手に懸かって死ぬなどおこがましい。統治者としてアンガ国を治めるなどとてもないことだ、と云う差別的暴言に対する償いは何処に示されていると云うのか。スータヴァンシャ、すなわち御者の家系が彼ら自身の身分より下位に位置付けられると云う理由から、ラードヘーヤはその暴言にも忍耐で持ちこたえさせねばならないとでも云うのか。既述のようにウドゥヨーガパルヴァンによれば、クルクシェートラの大戦の開戦の直前にクリシュナはラードヘーヤに対してドゥリョダナとの分離のための説得工作を試みる中での会話において、彼自身の本音を聞かされている身である (ibid. 141.45)。しかし、戦闘におけるアルジュナへのクリシュナの進言や、彼のラードヘーヤへ浴びせた言葉の中には後者への理解と認識は皆無である。それは何を意図するのか。

ブラフマーストラの術は有徳のバラモンもしくはそれに準ずる資質優れたクシャトリヤにしか伝授され得ないものとされていた。ドローナは、アルジュナにこの術を伝授していた。かつて、スータプトラであると云う理由からドローナに武術の教授を拒否されたラードヘーヤはバルガヴァの処へ出向き、武術の取得を試みた。ラードヘーヤに好感を抱いた彼は自分の取得している諸術の全てを伝授した。彼もまた師匠から教授された術をことごとく修得した。ある日、ふとした出来事、すなわち、甲虫が彼の太股を噛み切った。彼は自分の太股を枕に仮眠している師匠の安眠を妨害しないように、苦痛を耐え忍んでいた。これが裏目に出て、師匠は彼が身分を偽って弟子入りしていたことに気付く。彼はクシャトリヤに対して嫌悪を抱いているバルガヴァによって呪われた。彼は既に師匠よりブラフマーストラの発射術を取得していたのであるが、結果的には師匠の呪いのために、その術を最も必要とする機会、アルジュナとの闘いのときに使用できずに終わった。

しかし、現実にはブラフマーストラは安易に使用されることが許されるようなものではない。『マハーバーラタ』(Adiparva. 138.9)によれば、この武器はシヴァ神によってアガストヤに与えられ、その彼はアグニヴェシャ (Agniveśa) に与えた。そしてアグニヴェシャはドローナにそれを与えた。ドローナはそれをアルジュナに与え、その使用について次のように教示している。君はこの箭を人間に向けて決して発射してはならない。もしも、それが卑しい人間に対して用いられたならば三界は破滅されるだろう。この武器は世に比類ないものであると云う。純粹潔白を維持せよ。私の云うことに耳を貸せよ。もしも、人間より他の敵が

君を攻撃して来たときには、この武器は戦闘において彼敵を殺害するだろう、と。

時間的前後関係からすれば、インドラへの甲冑と耳環の施与の行為よりも以前に、ラードヘーヤはブラフマーストラの発射術をバールガヴァから伝授されていたと考えられる。彼によって呪われ、取得した術の効力がどれ程であるか未知であったとは云え、彼は自身へのインドラの接近にも臆するところなく対処することができたのかも知れない。しかし、そのように考察することは不純すぎる。何故なら、彼はつねに自身に正直であり、主人に対して忠誠者であり、人倫に関して最善をつくし、裏切り行為を否としている人物として設定されている故に。彼自身は自身の出生に関わる差別によって疎外される苦悩を超越するための行為を求めた人であった。自らが試みた懇請者に対する施与の誓いを果敢に貫徹する行為、自己犠牲の中に彼は心の平安を発見した人物であった。神々の主であり、この宇宙の施与者の至上者インドラから懇請されたラードヘーヤはこの世での生存のための不可欠の条件を彼に施与することによってインドラを超えた。ラードヘーヤの自己犠牲は恒久に不滅であるとインドラによって賞賛されていることは、彼が既に人間を超越した存在と云うことを意味する。少なくとも、自分の欲心を充すために姑息な手段を駆使する者ら、神々を超えた存在者と云えるであろう。

#### 10. ラードヘーヤへのアルジュナとクリシュナの試み

クリシュナとクンティーによるラードヘーヤに対するクルクシェートラの戦を回避する目的のための説得は淡泊に処理されていることが解る。ラードヘーヤによる彼ら両者との対応の終りを見ればそのことを知り得るだろう。アルジュナに荷担するクリシュナは敵対する存在であるにも関わらず、彼はその素振りすら見せず、別れの言葉を述べ、相手をしっかりと抱きしめている (Udyogaparva 143.48~50)。同様に、クンティーとの場合にも彼はアルジュナ以外の四人には決して挑まないことを約束してお互いに「至福に巡り会えますように」と交わしあって別れている (ibid. 146.27)。彼ら両者はラードヘーヤを直接的、物理的にパーンドゥ五兄弟軍に引き入れることはできなかったが、彼の心境を読み取る機会を得て、彼自身の身の処仕方に対する見解を肯定している。すなわち、クルとパーンドゥ軍の大戦争は回避できない、それにも関わらず、両軍の戦が肯定されると云うことは何を意味するのだろうか。両軍ともバラタ (Bharata) 族である。同族の中での戦が是認されると云う事態を考察するとき、そこにどちらか一方の軍の肅正の断行が読み取れるだろう。クリシュナの統轄下におけるクル軍の肅正、殲滅が意図されていることが知られよう。すなわち、ラードヘーヤは自らの破滅の予言をクリシュナとの対談の中で彼に告げているのである (ibid. 143)。

ラードヘーヤとアルジュナの力能的優劣は如何に読み取り得るだろうか。ラードヘーヤ自身が出生時に既にスーリヤから賦与されていた状態を維持する限り、彼は無双無敵の存在者である。武術修得者の術の公開披露の会場におけるラードヘーヤの術はアルジュナのそれを

凌いでいたために、アルジュナは蒼白の面を隠せなかった。ドローナが彼にブラフマーストラの発射術を教授しようがしまいが、ラードヘーヤは万石の存在が保証されていたに違いない。しかし、我が子アルジュナの身の安全確保を願うインドラの策略に対してさえも、敢えてその希望の品々である耳飾りと甲冑を身体から切り離し、既にインドラに施してしまっている彼にとってはクリシュナの奸智による戦術に対応するだけの方策を持ち合わせていない。それ故、彼にとってアルジュナとの闘いは、アルジュナ自身との闘いではなくて、殆ど、絶対者、神的存在者、クリシュナの介入、進言に加えてアルジュナの弓の威力と云うことである。

### むすびにかえて

ここまで収集して来たアルジュナらがダルマを無視した形での諸々の行為は全てクリシュナによって殺害を鼓吹された結果である。『マハーバーラタ』の作者ヴィヤーサ (Vyāsa) は、高貴、高潔さの権化であるアルジュナに、これらの戦闘の理念に対する違反行為の責任を負担させていない。当時の法典に則る限り、戦士の名誉や戦に関するダルマに違反した行為は悪であることを否定できない。この行為を遂行させ、社会規範を無視させた力用を肯定的に処理していると云うことは何を意味しているのか。世間、人事のダルマに規制されない存在の威力の荷担と云うことになるであろう。すなわち、アルジュナのダルマ違反行為の責任は全くクリシュナの負うところであると云うことは、クリシュナ自身の存在が人間を超越したものとして処理されているのである。人為を超越して人為の解決処理を可能にする存在者、絶対者、神に依存する拒否できない審判を下し得るものとしてクリシュナが居り、作者は彼を神の化身として処理していると云うことができるだろう。このクルクシェートラの戦に限らず、身体的暴力や戦争によって悪を征服、制圧すると云う力の論理は、当事者同士の利害を正当化する試みに他ならず、物質的な力を用いた「正義のための戦」と云って見たところで所詮数限りない害悪を生産するのみであり、その戦の終結における収穫は、人間の愚かさ、生命のはかなさ、行為の空しさ、惨めさの自覚と醜態を露呈し、害悪の再生産と不法の増殖と云う現象を引き起こすことを示唆していると云うように読み取るべきなのかも知れない。

### 参 考 文 献

- ① (tr.) M. N. Dutt; Mahābhārata, 7 vols, Delhi, 1994.
- ② K. Subramaniam; Mahābhārata, Bombay, 1965. Contents ; Adiparva, Vanaparva, Udyogaparva, Bhīṣmaparva, Droṇa-parva, Karna-parva, Śāntiparva,
- ③ 辻直一郎編；印度（南方民族誌叢書）東京、1943. pp.157～393. 中村 元論文「神話と伝説」
- ④ C. ラージャコーパーラーチャリ著・奈良毅&田中嫻玉訳；マハーバーラタ 上・中・下、東京、1975.
- ⑤ 山際 素男編著；マハーバーラタ, vol.1～3.